えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第88号
平成27年
(2015)
11 － 12

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸・東京 下町めぐり　日本橋小網町……1～2
第7回えど友研究発表会……3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「町人の敵討ち」、〔映画「幕末太陽傳」に見る幕末の品川〕／えど友サークルだより／友の会めも
友の会セミナー「大相撲に見る江戸時代と変化」……6
友の会セミナー「有力大名が造ったー風変わりな庭々ー」…7
学習会「板橋区立郷土資料館」……8
友の会特別観覧会
　「浮世絵から写真へー視覚の文明開化ー」……8
「えど東京一景」(3)－目黒富士－……9
江戸博クリップ〔「自称」旗本〕……9
江戸名所図会を歩く㉒
　［霞山稲荷明神祠から冬嶺山松秀寺］……10
「館蔵古文書翻刻プロジェクトチーム」活動開始……11
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

江戸・東京 下町めぐり

日本橋小網町

～古き江戸の香りを今に伝える町～

日本橋小網町

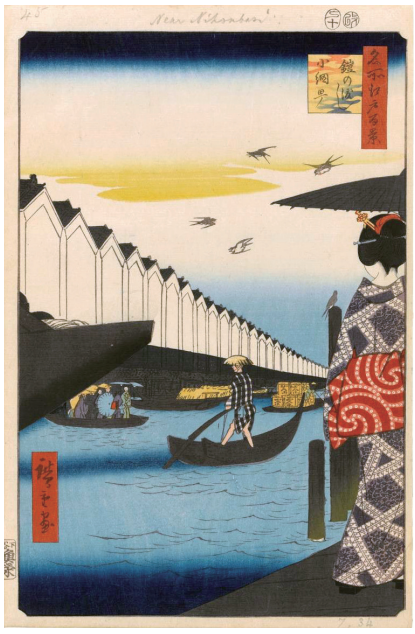
小網町という小さな町をご存じですか？　地下鉄茅場町駅を上がってすぐの茅場橋を渡ると、そこはもう小網町、また別の出口から上がり、東京証券取引所の前を通って鎧橋を渡れば、そこはやはり小網町です。日本橋川に沿って、人形町、蛎殻町、小舟町にぐるりと囲まれた小さな町です。

小網町はその名が示す通り、その昔、河岸や入江が多くあり、小網曳きが行われていました。

小網とは沖へ100間(180m)張り出す漁獲法で、一方、中網は200間(360m)、大網は300間(540m)も沖へ張り出す曳網漁、千葉県九十九里の大網白里市に今もその名があります。

徳川家康入府以降、小網町の漁師たちはその腕を買われて幕府肴御用を命じられ、白魚献上の特権を得ていました。その後に、摂州佃村からはるばる江戸に下って来た漁師たちが佃島に居住して同じく白魚役を賜り、小網町と二分するようになりました。

その後、小網町は水上交通の発達につれ物資の輸送の拠点として、商業の町へと変貌していきました。小網神社(文正元年・1466創建)を中心に、江戸時代から続くお店が今も健在です。釜屋もぐさ本舗(万治2年・1659)、楊枝のさるや(宝永元年・1704)、荒物・雑貨卸店の阿波屋(現森友通商)(安政元年・1854)、漁網・ロープの金久保商店(文久元年・1861)等々…。



▲広重「鎧の渡し小網町」

明治時代以降、さらに新しい町に飛躍的に発展、日清製粉、ヒゲタ醤油、キリンビール、小網商店など大店が続々と軒を並べ隆盛を極めました。今も小さな区域ながら小網町は「山椒は小粒でピリリと辛い」昔ながらの町です。

落語「宮戸川」そして秋色桜

落語「宮戸川」に出てくる若い主人公は、小網町の質屋のせがれ半七と、隣の船宿の娘お花です。将棋で遅くなった半七と、カルタ遊びで同じように遅くなったお花は2人とも

締め出されてしまいます。霊岸島の叔父さんのところに泊めて貰おうという半七に、お花も無理やりついていきます。

２人をワケありの仲と早合点した叔父さんは無理やり２階に上げます。そこには一組の蒲団。仕方なく、２人は境界を帯でつけて背中合わせに寝るのですが、夜中に急に雨が降り出し、近くに落雷。お花はとっさに半七にしがみつく！

鬢付け油と化粧の匂い、緋縮緬の長襦袢の裾が乱れ、真っ白い足が稲妻に浮かび上って思わず半七も…。あとは本が破れて分からなくなっちゃった…。

▲茅場橋から小網町を望む

この落語は、昭和16年(1941)、時局柄ふさわしくないと、上演が自粛され、浅草寿町の本法寺境内の「はなし塚」に葬られた、いわゆる禁演落語53演目の一つになっています。

「宮戸川」は作り話ですが、小網町の菓子屋の娘お秋は元禄期に実在した女性です。13歳の時、親に連れられ上野に花見に出かけ、井戸端の桜の前で賑わう花見客を見て「井戸ばたの　桜あぶなし　酒の酔」と詠んで、それを清水堂のしだれ桜の枝に結びつけます。その句を上野寛永寺の輪王寺宮様がたいそうお褒めになって、たちまち江戸中の評判になりました。この桜は彼女の俳号にちなんで秋色桜と呼ばれ、代々植え替えられ、今に受け継がれています。「秋色桜」は講談の演題にもあり、今でもよく高座にかけられています。

小網町のその菓子屋は、関東大震災後、港区三田に移転して「秋色庵大坂屋」という店名で今も営業を続けています。元禄年間創業以来、現在17代目、「秋色最中」「秋色羊羹」「秋色汁粉」などお秋さんにちなんだ和菓子が売られています。

日本橋最古の小網神社

さてしんがりは小網町の名の由来ともいわれる小網神社(小網稲荷・強運厄除けの神・東京銭洗い弁天の社)です。室町時代創建の歴史ある神社ですが、今はビルの陰にひっそりと佇むまことに小さな神社です。

そんなあまり目立たない神社ですが、今から５年前、テレビの「東京のパワースポット」という特集で取り上げられ一躍有名になりました。それ以降、世間ではパワースポットという言葉がすっかりもてはやされ、各地のパワースポットを紹介する番組が続々登場、国内外を問わず、それを巡るツアーも大変な人気になりました。そんな中で小網神社が最強のパワースポットとして紹介されました。

いわく、関東大震災の時、社殿は倒壊したものの、先々代宮司がご神体を抱えて新大橋に避難し、橋の上は押しかけた大群衆で溢れたにもかかわらず橋自体も落ちずに助かった…。

更に昭和４年、明治神宮を建立した有名な宮大工頭によって再建された小網神社ですが、あの東京大空襲の時、あたり一面焼け野原になってしまったのに、なぜか小網神社の社殿だけが無傷で残った…。

また太平洋戦争で小網神社のお札を戴いて出征した兵士たちが全員戦地から無事に帰還した等々…。

昔から伝えられている話なのですが、戦後65年も経ってから急にそんな話が広まったわけで、今更ながらテレビの持つ影響力の凄さに驚かされます。

日本橋七福神めぐり

今や正月ともなると、日本橋七福神めぐりの一つとして、善男善女がわんさと訪れ長蛇の列をなすようになりました。七福神といっても日本橋は８カ所をめぐります。「べったら市」で有名な寶田恵比壽神社(恵比寿神)、江戸時代、富くじの興業で賑わい、落語「宿屋の富」や「富久」の舞台にもなっている椙森神社(恵比寿神)、常陸から分霊した笠間稲荷神社(寿老神)、遊女町元吉原の氏神様だった末廣神社(毘沙門天)、毎年酉の市が開かれる松島神社(大黒天)、地元の人々から「お水天宮さま」と親しまれているご存じ水天宮(弁財天)、佐倉城主大老堀田様の広大な中屋敷に祀られていた茶ノ木神社(布袋尊)、そして小網神社(福禄寿、弁財天)です。

▲小網神社

小網神社は来年、実に創建550年の節目の年にあたります。あの江戸総鎮守神田明神でさえご遷座400年です。目下、社殿や神楽殿、境内の改修工事を行っていて、今月(11月)中には完成の予定です。来るべき平成28年にはご遷座550年の記念大祭が盛大に挙行されるそうです。

小網町は今やすっかりオフィス街に変貌してしまいました。しかし来年は、古き良き江戸の香りをかすかに残すこの小さな町が、奉祝の神輿や山車の行列で賑わうことでしょう。

※参考資料　佐藤光房著『続東京落語地図』朝日新聞社刊

【取材】文・写真・イラスト：広報部会・岡本　脩

第７回　えど友研究発表会（平成 27 年８月４日）

江戸の食文化と薬をテーマに、２氏が発表

「えど友研究発表会」は今年で７回目になりました。今回は、須賀さんが「江戸の食生活で考えさせられたこと」、國定さんが〔富山の薬売り「反魂丹」のルーツ―創始者は備前の万代常閑―〕について発表しました。参加者は129人でした。

「江戸の食生活で考えさせられたこと」

須賀　靖さん

朱引き内の土地は、おおよそ半分が農地で、その残りの土地の70％が武家地、15％が寺社地、15％が町人地でした。太田南畝が「五歩に一楼、十歩に一閣、みな飲食の店ならずという事なし」と記しています。江戸の町を五歩行けば居酒屋があり、十歩歩けば料亭があるということです。町人地の半分は飲食店のようでした。

産　地

江戸湾は内海でたくさんの河川が流れ込んでいます。美味しい魚がいないわけがありません。隅田川は白魚が獲れるほどきれいな水でした。

千住のネギ、滝野川のニンジン・ゴボウ、谷中のショウガ、練馬の大根、目黒のタケノコ、早稲田のミョウガ、羽田の梨、品川のカブ、小松川の小松菜、砂村のネギ・ナス、亀戸の大根、本所のウリなどが有名です。

物　流

江戸に入ってくる農産物は、例えば練馬から大根を馬の背に載せて10数 km 先の筋違橋(今の万世橋近く)にある青物市場まで運んできました。そのさまは、まるで畑が動くようだといわれました。酒は、樽廻船で大坂から運ばれました。大坂から運ばれてきた物を下り物といい、品質が良く、それ以外の物は「くだらない」といわれていました。魚を売る棒手振りは、魚が腐りやすいので、早くお客に届けるように、かかとのない草履をはいて、日本橋の魚市場と得意先を何回も往復していたようです。

食べ方

普通の人々が何を食べていたかについては、書物には書かれていません。草双紙などの挿絵に描かれている料理を見て判断するしかありません。しかし「日々徳用儉約料理角力取組　為御菜」には、一般庶民が食べていたおかずを番付に見立てて載せています。この番付を見ると、右側に「精進方」(野菜のおかず)、左側に「魚類方」(魚のおかず)が載っています。右上に「大関　雑　八杯豆腐」とあります。江戸時代では大関が最高位です。「雑」は四季のいつでも食べられているものです。他に載っているおかずには、今の私たちにもお馴染みのきんぴらごぼう、めざしいわし、けんちん、てんぷらなどがあります。八杯豆腐ですが、お猪口で醤油１杯、酒１杯、水６杯を鍋に入れて沸騰させ、豆腐を切って入れて、大根おろしを添えて食べるととても美味しいのでぜひ試してください。

〔富山の薬売り「反魂丹」のルーツ―創始者は備前の万代常閑―〕

國定美津子さん

「置き薬」といえば、越中富山の売り薬が有名ですが、その創始者とされる医師万代常閑の末裔が私の母方の祖母であることを親族から聞かされていました。興味を持ち、そのルーツを調べてみました。

売薬の歴史と万代家

万代家の初祖掃部助は、泉州境浦の万代村に住み、延元元年(1336)に異国船が漂着した際その救助にあたり、その時に「延寿反魂丹」の製法を伝授されたといわれています。３代主計の時、応永年間(1394～1428)に備前国に移り住み、常閑と改名、家名も「もず」から「まんだい」に改め、家伝の「延寿反魂丹」をもって医を業としました。

11代常閑が長崎へ旅した時のこと、懇意になった富山藩士日比野小兵衛が腹痛で苦しんでいた際に、常閑が与えた反魂丹で腹痛が治まりました。小兵衛は、常閑からその丸薬の製法を学び、藩主前田正甫が腹痛で苦しんだ時も反魂丹で平癒しました。元禄３年(1690)正甫が江戸城に登城した折、陸奥三春藩の藩主・秋田輝季が激しい腹痛を訴えて倒れたので正甫が持参していた反魂丹を与えると、またもや痛みが治まりました。あまりの即効に驚いた諸大名から自藩にも販売して欲しいとの申し入れが相次いだため、正甫がこれを藩内の薬種屋松井屋源右衛門に命じて製造、販売させることにしました。このことで常閑は富山の売薬の創始者とされています。

富山の薬売り

反魂丹の効き目は顕著で評判となり、正甫は源右衛門に広く諸国へ売り広めるよう命じ、源右衛門の手代源兵衛が諸国へ販売することになりました。また、八重崎屋源六は、良家の子弟を選び、諸国の大庄屋に薬を配置させました。これが商標「越中反魂丹」の始まりで、この商法を「先用後利」といい代金後払いの「置き薬」になります。春と秋の２回、売薬人が諸国の大庄屋に薬を預け、半年後に集金に出向きます。冬と夏の在宅時に、売薬人が薬種問屋から薬の原料を仕入れ、自宅で丸薬を製造します。富山藩では、明和２年(1765)に「反魂丹役所」が設置され、販路を拡大していきました。

岡山藩での反魂丹

８代常閑は元和５年(1619)、岡山藩主池田忠雄に招かれ、城で反魂丹を調合献上し紋付袴を賜りました。元禄17年(1704)には11代常閑が藩主綱政から森下町に屋敷と「延寿返魂丹」の看板を下賜されました。岡山領内では大庄屋に反魂丹などを預けておく「大庄屋廻し」と呼ばれる置き薬・配置行商が普及しましたが、19世紀初頭に大庄屋廻しは廃止になりました。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

会員からの投稿

町人の敵討ち

髙　澤　金　吾

このたび友の会の『町方書上』翻刻のお手伝いを致しましたが、その中で町方の敵討ちについての記述がありました。武家の敵討ちについては多くの記録がありますが、町方では資料が少ないのではと思いご紹介致します。

この事件は文政７年(1824)10月10日夜に起きました。上州安久津村百姓、才市の養子、宇市(18歳)が実父源助の敵である市谷七軒町足袋職、安兵衛(35歳位)を四谷塩町一丁目路上で討ったのです。

いきさつは、宇市が幼少の頃母に死別し、父源助と共に上州高崎に出て、父は足袋職を致し同居の弟子安兵衛と暮らしていたが、あるとき源助と安兵衛が口論となったあげく安兵衛が源助を殺害、そのまま安兵衛は逃亡した。

その後、宇市は幼少につき家主の世話で上州安久津村百姓才市の養子になった。成長に従い親の死の経緯を聞き親の敵を討たんと発心し、念流剣術を４年の間修行した後、敵を討つべく小者や日雇いに身をやつし上州・野州・江戸と２年間敵を尋ねた。ある時安兵衛が江戸にいるという噂を聞き、浅草平右衛門町藤七方に身を寄せ行方を探しているうちに、四谷の紀伊国屋という店で足袋職をしている敵安兵衛を見つけた。早速敵を討たんとしたが、その日は将軍の駒場野御成りの日に当たるので憚り、あらためて翌日夜紀伊国屋の使いと称して安兵衛を呼び出し、四谷往還にて「源助倅宇市」と名乗り、逃げる安兵衛を追いかけ親の敵と叫びながら脇差で切り付け打ち果した。その後町内自身番屋に出頭し、敵討ちは御法度承知の上望みを達したので如何様の仕置もいとわずと申し出た。

町内より町奉行所へ届け出取り調べの上、あらためて町奉行榊原主計頭様御白州にて御糺しになり、結果宇市は手鎖の上浅草平右衛門町藤七及び町役人に預けとなった。其後再び奉行所に召し出され、御法度に背き敵討ち致したるは不埒だが、親に対して孝心の至りに付御咎めに及ばず差し構え無しと仰せ渡され、御地頭へ引き渡しになった。その外討たれた安兵衛の家主・奉公口入屋・雇い主等に過料を仰せつけられ一件落着となった。

町人が親の敵討ちをしたにも拘わらずお構い無しで、討たれた敵の雇主や世話した口入屋・住居の家主が過料を課せられた非常に興味のある事件のいきさつで、今までの厳しい御法度の江戸時代像とは違った味のある判決と思われます。

なお、これに関しては当事件を宇市の住居の名主と、事件場所附近の名主の両方から報告されており、詳細は最近翻刻発刊された『町方書上』第二巻13頁・第四巻294頁をご参照下さい。

映画「幕末太陽傳」に見る幕末の品川

大　橋　弘　依

私は、東京品川は東海道品川宿のすぐ近くで生まれ育ちました。すでに住人でなくなって30年以上たってしまいました。子どもの頃、兄や近所の男の子たちは、あのお台場でいかだ遊びや魚釣りをして遊んでいたものです。出身中学校の愛唱歌の中には、「自由に死んで不自由と、重たい墓石動かした。」と歌われるように、近くに板垣退助の墓もありました。考えてみると、幕末の面影があちこちに残っていたのです。住んでいたのは20代までで、その頃は何の価値も感じていなかったことが悔やまれます。自宅は南品川でしたが、多くの友人が住んでいた北品川はまさに宿場の真っただ中。現在は旧東海道沿いに商店街が広がっています。都内の多くの商店街がそうであるように、数十年前と比べるとさびれてしまっているのは残念です。たまに帰ってみると、史跡を訪ね歩くたくさんの方たちにびっくりします。あの土蔵相模跡にも足を運ぶことと思います。なまこ壁の土蔵造りの旅籠、相模屋のことです。私の記憶にはまったくなく、今は１階部分がコンビニのマンションになっています。

幕末文久２年(1862)、ある企みを実行すべく長州藩士がここ相模屋に集結しました。建設中だった御殿山の英国公使館が焼き討ちされた事件です。この事件が昭和32年(1957)封切りの川島雄三監督作品「幕末太陽傳」に登場します。幼いころの映画ですからリアルタイムでは観ていません。テレビで放送された時に夫が録画していたので、それとなく観る機会がありました。幕末ファンからすると、誰が高杉晋作を、誰が久坂玄瑞を、演じるのだろうと興味が湧きます。前者は石原裕次郎ですし、後者は小林旭です。しかしこの事件は物語の中の一つのトピックに過ぎず、この時代の人間模様が細やかに、しかも驚くほどのスピード感をもって描かれています。心中の話やら、身売りされる娘の話やら。原典は落語「居残り佐平次」だそうです。フランキー堺が演じる「いのさん」が主人公です。居残り、すなわち、相模屋に宿泊したものの宿代が払えず居残って旅籠の仕事をしているのです。ところがこの男、器用で心配りが抜群。あちらこちらから難題が持ち込まれては丸く収めてしまいます。軽妙な話術や頭の回転の早い「いのさん」は人気者です。すでに故人となった南田洋子や左幸子演じる花魁も江戸の女らしく粋で魅力的です。

私が住んでいた品川で、幕末には人情味あふれる人々が生き生きと暮らしていたのかと思いをはせることができる映画です。これを見るとふるさと品川に帰ってみようかなと思ってしまいます。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

８月19日(水)島田昭さんの月番で、お江戸両国亭で行われた「女流講談会 なでしこくらぶ」を鑑賞した。参加者17人。

９月15日(火)森川昌子さんと山内啓巳さん２人の担当月番。森川昌子さんが三遊亭歌之介の資料を配布し、歌之介と高田文夫の対談、落語「太陽に願いを」、鹿児島弁落語「竹の水仙」をDVD鑑賞した。山内啓巳さんが桂米朝を偲んで経歴について解説し、米朝の「焼き塩」と「はてなの茶碗」の落語をDVD鑑賞した。参加者18人。

◆藩史研究会

８月５日(水)竹中祐見子さんが「沼津藩」の発表をした。関が原の戦いの後、徳川氏の家臣大久保家(彦左衛門の兄)が治めたが嗣子無く断絶。天領の時代が続いたが安永６年(1777)に水野家(家康の母、於大の家系)が領主として入り、沼津城を再建し、その後幕末まで続いた。参加者15人。

９月11日(金)大渡眞司さんが「柳生藩(家)の歴史」の発表をした。柳生家は、代々将軍の剣術指南を勤め、歴代藩主は江戸定府で柳生に陣屋を持つ特殊な大名だった。柳生家の出自やその推移、「柳生新陰流」について様々な逸話を交えて詳しく紹介された。参加者16人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

９月10日(木)八丈島の島役人長戸路家に伝わる寛政４年(1792)の御用留(下)P23～33を解読。幕府から年貢代わりの反物についてお尋ねの件と回答。飢餓救助の内訳。参加者７人。

９月25日(金)御用留(下)P33～40を解読。幕府から給付された飢餓の助け扶持の明細。米は少しで稗と粟が主。参加者８人。

◆江戸東京を巡る会

９月６日(日)初秋を感じながら、白金を巡った。東大医科学研究所の記念館を訪れ、自然教育園では雑木林や水生植物等に都心に居ることを忘れた。隣接の昨年11月にリニューアル開館した東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)ではアールデコ様式の建物を楽しんだ。参加者43人。

◆『江戸名所図会』輪読会

９月17日(木)大澤憲一さんの担当。現在は西向天神社と呼ばれる大窪天満宮、七面大明神(現在、法善寺に安置)、自証院は新宿区内旧大久保地区にある。そこから高田馬場の諏訪神社や北新宿の鎧神社までかなり広範囲の説明があった。今回は挿絵が多く、絵解きが楽しめた。新宿区の区の花であるツツジの由来であろう「大久保の映山紅(きりしま)は…」は挿絵にその見事な様を讃える文があるが「諏訪谷村 諏訪明神社」は挿絵だけで本文がないのも不思議だった。参加者16人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

９月24日(木)『えど友』第54号10頁の「落語で江戸散歩⑬中村仲蔵」をなぞって歩いた。東京メトロ人形町駅に集合。中村仲蔵が住んでいた今の人形町、甘酒横丁から清正公寺に寄り浜町公園を抜けて浜町河岸通りを北上して両国橋を渡り、江戸博で小休止した。建設中のすみだ北斎美術館などを見て、長崎橋から大横川親水公園を歩き、報恩寺へ寄った。天神橋を渡ったあと、亀戸銭座跡、亀戸天神、国産マッチ創始者の碑、龍眼寺(萩寺)などを参拝・見学しながら、柳島の妙見山法性寺まで歩いた。参加者44人。

９月27日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者33人。

◆日本の大道芸伝承会

８月20日(木)外郎売り、がまの油売りで発声練習をした後、南京玉すだれ等に加え、蚊帳売り、かりんと売り、おでん売り等新演目に挑戦した。参加者３人。

８月24日(月)深川江戸資料館で開催される「江戸の物売りと大道芸」のリハーサル。本番どおりのシナリオに従い、南京玉すだれ等これまでの演目に加え、蚊帳売り、おでん売り等の新演目も観客を意識して総合練習した。参加者３人。

９月12日(土)深川江戸資料館主催イベント「江戸の物売りと大道芸」へ出演。南京玉すだれ等これまでの演目に加え、蚊帳売り、おでん売り等にも初挑戦。観客の評判も上々だった。参加者３人。

９月16日(水)深川江戸資料館主催イベント「江戸の物売りと大道芸」の反省会及び通常の練習。参加者３人。

◆江戸を語る会

８月29日(土)高田利正さんの「ヘボン式ローマ字」で有名なヘボン(ジェームス・カーチス・ヘップバーン)についての発表があった。幕末から明治にかけて日本の社会・文化発展に寄与したヘボンという偉大にして高潔な人物を改めて知ることができた。参加者10人。

◆かっぽれの会

９月２日(水)入門曲「奴(やっこ)さん」をお稽古した。参加者３人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込み下さい。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成27年８月～９月

◆役員会８月11日(火)15人。９月８日(火)15人。◆事業部会８月４日(火)21人。９月１日(火)21人。◆広報部会８月18日(火)10人。９月15日(火)10人。◆総務部会８月25日(火)20人。９月29日(火)19人。◆町方書上翻刻プロジェクト８月６日(木)A・B合同会議。15人。８月20日(木)A・B合同会議。16人。９月３日(木)A・B合同会議。14人。９月17日(木)A・B合同会議。15人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト８月20日(木)顔合わせ18人。９月３日(木)A９人・B９人。９月17日(木)A９人・B９人。◆古文書講座　入門編：９月２日(水)午前95人・午後81人。初級編：９月16日(水)午前70人・午後51人。中級編：９月19日(土)午前34人・午後28人。

第155回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年8月22日）

大相撲に見る江戸時代と変化

講師　中村史彦（ふみひこ）さん（相撲博物館学芸員）

櫓、興行場所

ＪＲ両国駅を出て、国技館の方を見るとまず目につくのが高い櫓（やぐら）でしょう。もとは木戸（入場口）の上にあった芝居櫓で、それが独立して高くなりました。現在の櫓は鉄骨製で19ｍほどあり、私も上りましたが揺れるのに驚きました。風のあるときはかなり揺れるはずで、「寄せ太鼓」（興行中の朝８時から30分）や「はね太鼓」（弓取式終了から15分）を叩く呼出しは怖いのではないでしょうか。

江戸時代の興行場所は両国回向院のほかに蔵前八幡、深川八幡、芝神明、神田明神、茅場町薬師がありましたが、両国が大変賑やかな盛り場になったため、天保４年（1833）に回向院に定着しました。そのころ相撲は屋外で行われていたため、雨天や降雪があると順延になり、興行期間が長くなると経費が余計にかかってしまいました。安定した興行を行うために完成したのが旧両国国技館です。今から100年以上も前の明治42年（1909）６月のことでした。現在の両国国技館は出来てから30年も経つので、周りに江戸東京博物館をはじめ、第一ホテルやＮＴＴドコモ墨田ビルなどたくさんの建物がたち並ぶようになりました。

四神が宿る土俵

相撲に欠かせないのが土俵ですが、かつては人が囲う中で相撲を取っていました（人方屋（ひとかたや））。土俵がないので当然、押し出し、寄り切りはなく、また、密集している人の中に力士が飛び込んで喧嘩や怪我になることが多かったようです。そこで、元禄年間（1688～1704）のころから、俵で囲った中で取り組むようになりました。次第に壇状になって舞台の要素が強まりました。この土俵を雨から守るために屋形（屋根）があり、これを支える四本の柱がありました。江戸末期にはこの柱に四季や方角、四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）を表すために青、赤、白、黒の絹を巻いていましたが、昭和27年（1952）９月場所から、四本柱を撤去して天井から屋形を吊り、四色の房を下げるようになりました。高さが約60cmある土俵は場所ごとに造ります（土俵築（どひょうつき））。この作業を任されているのが呼出しで、タコ・タタキ・コテなどの道具を使って３日かけて仕上げています。呼出しは、動きやすい「たっつけ袴」を身に付けていますが、この姿は昔も今も変わらず、変わった点といえば、背中にスポンサー名がついたことでしょうか。

力士のまげと着物

江戸時代には様々なまげの形がありましたが、現在ではまげの先が銀杏（いちょう）の葉の形をした大銀杏とちょんまげの２種類だけになりました。このまげを結うために床山（とこやま）という専門職が50人ほどおり、稽古後や場所中の取組前、取組後などに力士の髪を整えています。

力士は場所入りや巡業、公式行事などの外出時には着物を着ますが、地位や行事、季節によって身につける着物、履物に違いがあります。例えば、幕内力士の場合、５月・７月・９月の場所入りには「染め抜き」を着なくてはならず、その他の場所（初場所など）では羽織に着物姿と黒か紺の足袋というのが決まりになっています。地位が落ちたら相応の着物になります。

武士姿だった行司

昔は立ち合いの形は自由で、中腰（ちゅうごし）のままや指を立てる形、あるいは低い（平ぐも）形と様々でした。また、仕切りの制限時間もありませんでしたので、呼吸が合わなければ延々と仕切りを行っていたのです。土俵上に仕切り線が出来たのが昭和３年、当時は60cmの間隔でしたが、昭和45年に力士の大型化により70cmになりました。また土俵上に両手をつく、という決まりが出来たのはまだ新しく昭和59年のことで、平成20年に改めてこの決まりを徹底することになりました。土俵上での取組の進行や勝負の判定を一瞬のうちに行うのが行司で、武士の姿である裃（かみしも）を着ていました。ところが、明治時代になって施行された断髪令の影響で、まげがなくなったのに裃姿はおかしいとの意見があり、明治43年６月場所からは烏帽子に直垂（ひたたれ）姿となり、現在に至っています。行司は土俵上の采配が主な職務ですが、この他に場内アナウンス、取組や番付編成の書記、番付表の作成、巡業の輸送関連なども担当します。

優勝賜杯の始まり

昔は今と違って、番付の上がり下がりは勝敗数とは関係がありませんでした。特に幕内では上位力士が引退しないと番付が上がりませんでした。成績によって番付を作るようになったのは明治15年からです。また同じ部屋でも大名の抱えが違うと対戦させていました。今は優勝争いに注目が集まりますが、長い間優勝制度はありませんでした。国技館の２階席の上にずらりと飾られている優勝額が贈られるようになったのは明治42年から、また賜杯による表彰が始まったのは相撲が大好きだった昭和天皇が摂政時代の大正15年（1926）１月場所からでした。江戸時代から明治時代にかけては、現在と相撲の楽しみ方が違っていたのでしょう。

レポーターからひとこと

写真と絵満載のレジュメを用意され、こと細かに相撲の世界を語ってくださいました。まだいろいろとお話されたいことがあるようですので、近い時期にまた機会を設けていただきたいと思います。　　参加者123人。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

第156回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年9月12日）

有力大名が造った
―風変わりな庭々―

講師　吉河　功さん（日本庭園研究会会長）

はじめに

本日はたくさんの大名庭園の中でも特に珍しい特色を持った12の庭園についてお話ししたいと思います。また最後に、江戸時代前期の名書家佐々木文山をご紹介し、全国の社寺等に扁額や石柱が保存されている彼の代表的な筆跡を見ていただきたいと思います。

藤堂氏下屋敷（染井）

―石造物などのあふれる庭

本庭は、他の大名庭園とは一風変わっていて、２万坪の園内の各所に多数の石造物が配され、さながら石造品展示場の感がありました。高さ１丈余りの石地蔵立像、石不動、張果郎像、高さ４尺の石金剛力士像などがありました。

松平頼元上中屋敷(大塚吹上)「占春園」

―桜が中心の庭

頼元は水戸初代藩主徳川頼房の子(光圀の弟)です。敷地６万２千坪に及ぶ広大な敷地内の庭園には、頼元が「占春」と名付けて愛でた高さ数丈もある山桜の古木がありました。２代頼貞が桜の下でよく宴を開いたのにちなみ、３代頼寛が父の追憶のために桜を植え増して「占春園」と命名しました。現在、本園の跡地は筑波大学付属小学校の自然観察園になっています。

松平定信抱屋敷（大塚）「六園」

―平等院鳳凰堂のあった庭

松平定信は大塚の屋敷に庭園を築き、春園、秋園、果園、竹園、集古園、攅勝園を設け、総称して六園といいました。本園には、その他、宇治の鳳凰堂を現物の10分の１に縮尺した「善應堂」がありました。大名庭園の中にあるのが大変珍しいのですが、当時、鳳凰堂の傷みが激しく、その存続が危ぶまれたのを憂えて作らせたもので、さすが光圀と並ぶ大学者定信です。

佐竹氏（日暮里）「衆楽園」

―巨大立石と孟宗竹林の庭

秋田久保田藩主佐竹義格の抱屋敷の庭で、園中に巨大な立石があり、これを「挿天筍」(天に伸びたタケノコ)、竹林を「慈竹林」といいました。孟宗竹は、この竹がまだ珍しかった頃、薩摩島津候から贈られたものだといいます。江戸末期に日本に入ってきた外来種の孟宗竹は繁殖力が強く、竹垣の材料である日本のマダケやハチクを駆逐していきます。

松平治郷下屋敷（大崎）

―金閣を模した楼閣のあった庭

雲州松江城主松平出羽守治郷(不昧公)の下屋敷、その庭の高台の地に楼閣「蔟々閣」がありました。これは京都の鹿苑寺「金閣」を模しています。ただ屋根のてっぺんに瓢箪が乗っていますが、日本では大変珍しく、中国明代から清代の江南地方によく見られます。谷文晁を従えてここを訪れた松平定信はその体験を「夢のようだった」と記しています。

佐竹氏下屋敷(本所中之郷)「浩養園」

―石橋が注目される庭

本園は幕末、久保田藩主佐竹義堯の下屋敷で、江戸時代から非常に名高い庭園でした。

注目されるのは石橋です。園が解体され競売にかけられた時、三菱財閥の岩崎氏が買い入れ、その後東京市に寄贈されて駒込の六義園内に「渡月橋」として架けられました。

酒井氏下屋敷（牛込矢来町）

―寺院と名品手水鉢のあった庭

徳川家光から右腕と信頼されて老中から大老にまで上りつめた若狭小浜藩主酒井忠勝の下屋敷で、江戸初期としては大変珍しいことですが、忠勝は将軍家光から園内に菩提寺建立を願い出て許されます。延寿山長安寺で、山号は沢庵和尚の命名、寺号は家光自身によるものです。長安寺の忠勝墓前には、全国的にも珍しい手水鉢がありました。長さが２.３ｍもある名品で、現在は新宿歴史博物館に保存されています。

稲葉氏下屋敷（青山）

―名建築三笠閣と菱亭のあった庭

相模小田原藩主稲葉正則の下屋敷で、本園の中でも特に名高かったのが楼閣建築の「三笠閣」です。この閣は徳川家光上洛の際、京都二条城内に建てられたもので、後に春日局がこれを拝領、江戸に移して稲葉正則の青山別業内に建立されました。これは現在、横浜「三渓園」に移築、名も「聴秋閣」と改められました。

牧野氏上屋敷（茅場町）

―高さ８尺という「青石」のあった庭

丹後田辺初代藩主牧野親成が茅場町に邸地を賜り、作庭したと思われます。庭の築山に「青石」といわれた高さ７、８尺の巨石があり、源義家が東征の時、この石に鎧を掛けて戦勝を祈願したと伝えられてきたことから、牧野邸の後ろの渡しを「鎧の渡し」と名付けられました。

池田氏下屋敷（芝金杉）

―富士形築山と橋づくしの庭

藩祖池田光仲の代に幕府より海辺を拝領して埋め立てをしたので、当然ながら汐入式の大規模な回遊式庭園になっています。十橋以上の橋が架けてあり、園内には富士形の築山が三つもありました。

堀田氏下屋敷（向島）「七松園」

―７本の赤松が名物の庭

謎の多い庭、７株の赤松の見事な古松があって「七松園」の由来になっています。

尾張徳川氏下屋敷（戸山）「戸山荘」

―町屋・大手水鉢・龍門瀑のあった庭

本庭は、14万坪もの邸地に作られた江戸の地における最大規模の池泉回遊式の大名庭園で、庭内には小田原の街道をまねた長い町屋や龍門の滝が造られていました。

参加者137人。

【記録】文・写真：広報部会・岡本　脩

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成27年８月27日）

板橋区立郷土資料館を訪ねる

赤塚城の名残をとどめる緑豊かな赤塚溜池公園の池で、夏休み中の子供たちや大人が釣りを楽しんでいます。池を巡り階段を上ると板橋区立郷土資料館です。小林事業部会長の挨拶、清水部会員の説明のあと、館長の秋山さんから館の沿革・区の地形等について概説がありました。

板橋区は東京23区の北西にあり、北側が荒川に面した低地、南側が武蔵野台地です。三田線の志村坂上から志村三丁目への途中で地下鉄が地上に出ますが、まさしく武蔵野台地のへりで約20ｍの高低差とのことでした。高台のへりは日当たり・水はけが良く、古くから人々が住みついたようです。

全体会のあと班行動になりました。１階の常設展は「生きる 暮らす 戦う」が三大テーマです。「生きる」は３万年前の旧石器時代から平安時代までの生活の展示で、数多くの遺跡の発掘が行われた様子の写真や各時代の石器、土器などが展示されていました。「暮らす」は中世・近世が中心です。板橋は豊島郡と呼ばれ、豊島氏が支配して板橋郷、赤塚郷、志村庄ができましたが、のち太田道灌に滅ぼされ、道灌を頼ってきた千葉氏が赤塚郷を所領しました。江戸時代に徳川氏の直轄領となり、加賀藩前田家の下屋敷もあって、今も金沢小学校にその名が残っています。中山道一番目の宿場、板橋にかかわる展示も目を見張るものがありました。平坦な低地の徳丸ヶ原は幕末、西洋砲術の訓練をやった高島秋帆にちなみ、今は高島平といいます。「戦う」は近代以降です。戦時中は軍事産業が盛んで、双眼鏡、測量器などの工場があり、戦後はその技術が光学器械、カメラ等に活かされ、貴重なカメラ類が並んでいました。なお、中央に弥生時代の遺跡、江戸時代の村、昭和の空襲前の板橋の町の模型が置かれ、壁側の鎌倉時代から伝わる田遊びの神事の映像、また興国元年(1340)鋳造の大堂寺の鐘も見られました。

セミの大合唱のなか、生垣で囲った中庭に移動し、幕末の頃にできた茅葺の古民家の見学をしました。ザシキ(奥座敷)とデイ(表座敷)、納戸、お勝手の四つ間造りの田の字型でした。土間の竈では小学生の火起こし体験などを行うとのことでした。台所に蛇口が後付けされていました。家の脇に井戸、漬物樽、納屋があり、また他家の田舟、庭に石燈籠や庚申塔などが収集されていました。

２階の企画展は戦後70年、平和都市宣言30周年を記念する「板橋の平和」でした。平和祈念像の写真は板橋区役所にある立像で、長崎の坐像と同じ北村西望作です。また、沖縄戦で亡くなったご子息の遺品、家族写真などの寄贈された資料が展示されています。次に戦前の写真が並び、電車を待つ風景はのどかで庶民の状況は普段と変わりません。一方で出征兵士を送り出す写真、銃後の様子、千人針、寄せ書き、焼夷弾なども展示されていました。戦争が激しくなると、見送りの縮小や消費統制が強まっていく様子も「隣組回報」などの資料でわかります。今回、解説を大きく加えず見学者自身が資料で確認できる形を心がけたそうです。集団疎開先での子供たちの集合写真、急造の成増陸軍飛行場、加賀藩下屋敷跡の陸軍火薬製造場の写真も残されていました。平和都市宣言記念事業としての中学生の広島・長崎の旅や絵画展の写真もあります。時代の変化を感じ取り声を出していく必要性や、今の小学生は祖父母も戦後生まれで、日常戦争の話は出ないので、このような催しがあることを周囲にお伝え願えればとのお話で約１時間半の学習会を終えました。

参加者43人。

【取材】文・写真：広報部会・内匠屋京子

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成27年10月16日）

特別展「浮世絵から写真へ ―視覚の文明開化―」

10月10日から特別展「浮世絵から写真へ」が始まりました。この展覧会では、浮世絵と幕末に渡来した写真がお互いに影響し合って、それぞれに面白い表現方法を編み出していった過程を確認できます。

日本に写真が渡来したのは幕末の長崎でした。浮世絵や東都歳事記の挿絵などに描かれた、名所や美人のテーマは写真の中にも取り入れられます。浮世絵の名所とそっくりの場所と思える風景写真の展示では、絵と比較することによって時代の違いを感じられます。写真の「凌雲閣百美人」は錦絵「江戸名所百人美女」の100人の美人を集めるという発想にならったものでしょう。白黒の写真に彩色を施し、浅草の凌雲閣で展示されました。会場でも、100人全員の写真がパネルになっています。

明治になると、写真を参考にしてそっくりの浮世絵が描かれるようになります。小林清親の「大久保利通公肖像」など、明治の浮世絵師の描いたちょっと不思議な絵が見られます。

現在は廃れていますが、写真油絵という技法で描かれた絵が展示されているのも見どころです。旧江戸城の写真を撮影したことで有名な横山松三郎が考案し、弟子の小豆澤亮一が引き継ぎ、特許を取りました。それまでの彩色写真とは一線を画す、見事な出来栄えです。

エピローグでは相撲の街にふさわしく、相撲錦絵と明治の相撲の写真を展示。最後は写真に油絵具で彩色された横綱白鵬の優勝額がお見送りしてくれます。　　参加者67人。

【取材】文・写真：広報部会・中村貞子

えど東京一景

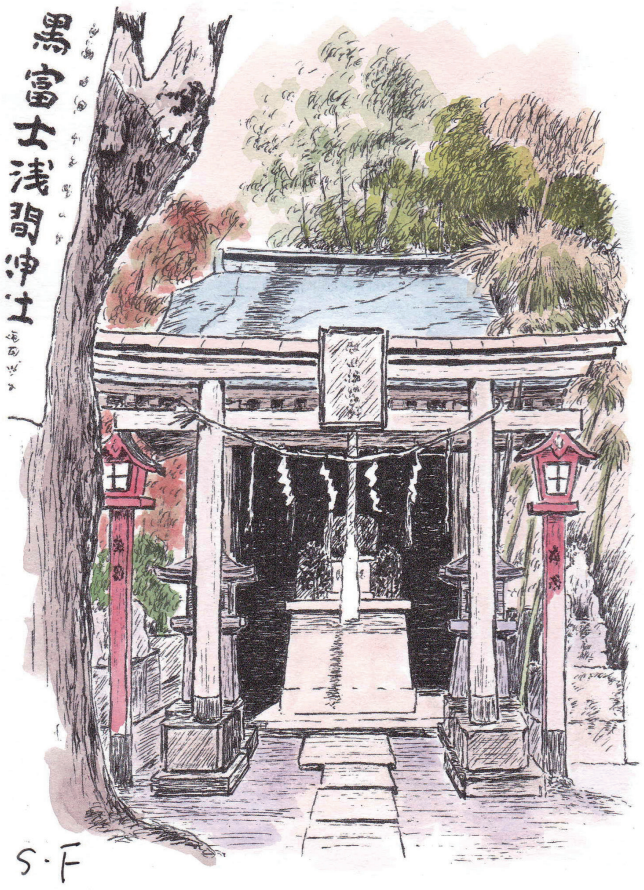
(3) ー目黒富士ー

歌川広重の『名所江戸百景』のなかに富士塚を題材にしたものが２種あります。いずれも目黒区内にあった「元不二(富士)」と「新富士」です。元富士は文化９年(1812)に丸旦講が築き、山腹に建てた石碑や頂上の石祠・浅間神社等に、講のシンボルマーク「㊦」を彫り込みました。そのため「丸旦富士」と呼ばれ、大評判になりました。

これに刺激されたのでしょう。文政２年(1819)、択捉探検で知られる近藤重蔵も、目黒の別邸内に新しく富士塚を築きました。以来､丸旦富士を「元富士(不二)」､重蔵の築いた富士を「新富士」と呼ぶようになり、共に名所となりました。

新富士は昭和34年(1959)までありましたが、元富士は明治11年(1878)に取り壊されました。その際、石碑や浅間神社は同じ区内にある大橋の氷川神社へ移されました。その後は長い間本殿脇で風雨に曝されていましたが、近年「目黒富士」浅間神社として日の目をみるようになりました。

氷川神社の境内は国道246号に接する高台にあります。この高台を利用して開かれたのが、目黒富士です。登山道は神社正面の階段に向かって左側へ少し歩きますと、同じ並びに交番があります。この交番と神社の間の狭い隙間が登山道の始まりです。コンクリートの階段を数段登りますと、その後は自然の地山です。頂上を10合とする合目杭の１合目がすぐ脇に立てられています。



【取材】イラスト：広報部会・福島信一
文：同・光田憲雄

江戸博クリップ

「自称」旗本

展示事業係　杉山　哲司（すぎやま　さとし）

６月より展示事業係で働いております､杉山哲司と申します。必ず間違えられますが､名前は「てつじ」ではなく「さとし」です。高校生までは竹の棒クラブ(剣道部)で、むさくるしい生活を送っていました。その後、大学・大学院で江戸時代(主に朝幕関係)を勉強しながら、徳川記念財団や新宿歴史博物館で働かせていただきました。

今回はお世話になった徳川記念財団との出会いについてお話します。徳川記念財団を初めて知ったのは､浜松市美術館で行われた「戦国の覇者徳川家康と浜松」展の内覧会に行った時です。自分はまだ大学３年生で､展示を見に行くというよりは鰻を食べに行くことが目的でした。しかし、思わぬところで気持ちが高ぶりました。それは、徳川記念財団理事長をはじめとする徳川家の方々をお見かけしたことです。「あの方々が徳川家の後裔か！」歴史を学んでいた自分にとっては、まるで芸能人を見たかのような気分でした。その１年後の夏､徳川記念財団で仕事をさせていただくことになりました。今思えば､浜松での出来事は伏線だったのかもしれません。浜松でお見かけした理事長にもお会いし、今までにない緊張を味わいました。江戸時代の大名たちも将軍に御目見した時は、相当緊張したことでしょう。怒られてしまうかもしれませんが､「これで自分は旗本と名乗れる」と心の中で思ってしまいました。貴重な経験をさせていただいたので､今後に活かしていきたいです。

今年の３月まで大学院に在籍していたので、社会人になるのは初めてです。皆様に多々ご迷惑をおかけするかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉒

[霞山稲荷明神祠から冬嶺山松秀寺]

（天現寺の虎石像）

今回は麻布から広尾・白金方面へと歩きました。猛暑からいきなり秋になったような８月下旬で、蝉時雨に包まれながらの街歩きでした。

霞山稲荷明神祠から瑞泉山祥雲禅寺

前回の続きは七仏薬師如来(東福寺)ですが、現存していないため次の霞山稲荷明神祠(現櫻田神社)から回ります。東京メトロ日比谷線六本木駅下車、夏休みで賑わう六本木ヒルズを抜け、けやき坂通りを上った丁字路近くに櫻田神社の鳥居が建っています。境内はさほど広くありませんが、拝殿前には文政９年(1826)奉納の天水桶が二つあり、その赤さびが歴史を感じさせました。

神社前のテレビ朝日通りを進むと、左側に朝日観世音を本尊とする専称寺があります。新選組隊士・沖田総司の墓があることで有名ですが、命日(６月24日)以外は非公開のため、訪れる人の姿はありません。石灯籠の周りにはナスがたわわに実っていました。

すぐ近くの通り沿いには子安薬師如来(瑠璃光如来)が本尊の正光院があります。図会の頃にあった大師堂・不動堂・地蔵堂などはすべて戦災で焼失しており、今は再建された本堂があるのみです。しかし、墓地には当時の年号が刻まれた仏像型の墓碑が多数残っていました。

中国大使館を左手に見て通りをさらに進んでいくと木下坂の下りとなり、左側には有栖川宮記念公園が広がっています。元は盛岡藩南部家下屋敷で、有栖川宮熾仁親王邸となった後に下賜されています。園内には丘陵や渓谷・池などが配され、変化に富んだ景色の中を歩けば気分爽快です。この日も散歩する人の姿が数多く見られました。

木下坂を道なりに進んで外苑西通りを越えた先の商店街には「広尾散歩通り」という名前がつけられています。文字通り散歩気分で歩いていくと、突き当たりに瑞泉山祥雲禅寺の山門が見えました。ここから塔頭の東江寺・霊泉院・香林院を左右に

▲長谷川雪旦　広尾原

見て鍵形の道を行くと祥雲寺の境内に至ります。本堂の左手に墓地があり、奥まったところには覆堂に納められた福岡藩主・黒田長政の墓があります。さらに周辺には黒田家をはじめとする諸大名の墓地群があって、実に壮観です。また、玄治店の名の元になった医師岡本玄治や浄瑠璃の初代常磐津文字太夫などの著名人の墓が多数ありますが、とにかく墓地が広大すぎて、探すのも一苦労でした。

毘沙門天から冬嶺山松秀寺

墓地の脇は明治通りで、平行して渋谷川が流れています。川の南側の都立広尾病院あたりは土筆が原(広尾原)と呼ばれていました。挿絵にはススキの生い茂る広尾原や、渋谷川の水を取り込んだ広尾水車が描かれていますが、付近の橋や歩道橋の上から眺めてもその面影は全くありません。

歩道橋を渡った目の前が毘沙門天で有名な多聞山天現寺です。山門を入ると左手に毘沙門堂があり、毘沙門天王の石碑が建っています。堂前には天保６年(1835)寄進の雌雄一対の虎石像があり、その表情は迫力満点です。また、光孝天皇御陵の石灯籠も門の脇に置かれていました。

明治通りを東へ向かい、光林寺前から五之橋を渡って渋谷川沿いの道をさらに進みます。四之橋の手前で郵便局の所を右折すると、三光坂(三錻坂)へと向かう道です。挿絵や切絵図には鷺森神明宮が右手に描かれていますが、現在の地図には全く載っていません。痕跡を探して付近を歩いてみると、とある家の庭に木造の鳥居と祠がありました。近くに寄って確認はできませんでしたが、鳥居の向きから見ると鷺森神明宮の跡だと思われます。

三光坂の手前を左折すると氷川神明宮(現白金氷川神社)があります。本殿の右側の稲荷神社は宇迦之御魂大神という衣食住の神様を祀っていますが、何ともこぢんまりしていて目立ちません。しかし、石段の脇に並ぶ狐のうち２体は親子狐で、その微笑ましい姿には思わず口元が緩みました。

通りを進むと冬嶺山松秀寺があり、山門前に「日限地蔵尊」の石碑が建っています。正式名は延命地蔵菩薩ですが、寺務所で確認すると現在は本堂奥の本寿院に安置されていて、中興開山・快存上人の命日のみ檀家に開帳されるそうです。境内には挿絵に描かれた六地蔵がそのまま残っていました。寺の脇が桜田通りで、東京メトロ南北線・都営三田線の白金高輪駅はすぐそばです。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

「館蔵古文書翻刻プロジェクトチーム」活動開始

代表　丹羽　高利

９月から「館蔵古文書翻刻プロジェクトチーム」(略称「翻刻チーム」)が活動を開始しました。

このチーム発足の狙いは、『町方書上』の全巻翻刻を終えたチームをそのまま解散することを惜しみ、新しいチームを立ち上げ「町方書上プロジェクトチーム」の人材と実力を引き継ぐと共に、古文書講座受講生の更なるステップアップの場を提供しつつ、友の会としてその知的財産を将来にわたって継承していくことにあります。更に、解読古文書の対象を江戸東京博物館所蔵の古文書とすることにより、「博物館と連携して地域文化の向上に寄与する」という友の会の主要目的を実現しようとするところにもあります。

この活動の成果をどのような形で具体化するかは、これからの進捗状況に合わせ検討することになっています。

新チームのメンバーを募集した結果、「町方」出身者９名(男５、女４)、新規応募者９名(男５、女４)の18名となり、８月20日(木)に、江戸博市川寛明学芸員のご出席を得て、初顔合わせ並びにオリエンテーションを行いました。

最初に取り組む館蔵古文書は、市川学芸員の推薦で『新古改撰誌記』(31巻)と『類聚撰要』(51巻)と決まり、この文書の学術的説明を受けた後、この18名を２班に分け、抽選でそれぞれの班の担当古文書が決まりました。

前者は、「五役」の中間頭の勤め方に関する控書であり、後者は雉子町の名主齊藤月岑が編纂した町触集の写本です。

９月から、いよいよ解読作業が始動しました。まだ少しばかりの解読ですが、それぞれの文書に書かれている一端を紹介します。

『新古改撰誌記』では、中間・小人が連名で上司の頭衆宛に「毎日二人で宿直しているが、食事の支給がないため、弁当を持参している。ところが、暑中の節は持参の弁当は翌朝には甚だ風味が悪くなり、寒中は弁当が冷えきっており難儀している。特に早朝よりの御成御供があるときには殊更です。ついては、宿直の際は、朝・夕・夜の食事の提供をお願いします」と願書を出し、「腰弁」の切実な願いは早速聞き届けられました。

『類聚撰要』』では、家屋敷(土地)売買の手数料並びに諸方面へのお礼(町礼)が多分に掛かり、町人が難儀していることから、「分一金(町への納付金)は百両につき２両、町礼は名主へ銀２枚、五人組へ金百疋宛、町中家持一人に鰹節一連宛とし、それ以下で行われているところは従来通りに行いなさい」との触が出されています。

まだまだこれから興味深い記事が出てくると思われます。読み解くのが楽しみです。

催事案内

古文書講座

各編とも来年１月から第３期を開講

期ごとに改めてお申込みいただくことになっておりますのでご注意ください。自動継続ではありません。なお、人数に余裕のある中級編の受講はおすすめです。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／６(水)、２／３(水)、３／２(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／20(水)、２／17(水)、３／16(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：１／16(土)、２／27(土)、３／19(土)

- 時間：各講座とも午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも11月30日(月)必着

◆第２期の残日程

入門編11／４(水)、初級編11/18(水)、中級編11/21(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会セミナー

第159回「江戸時代　公家の衣装」

講師　田中　潤さん(学習院大学非常勤講師)

◆江戸時代、京都に居住した公家はどのような装束に身を包み、京都や江戸における儀式に参加していたのでしょうか。男性公家の装束は、一般に「衣冠束帯」と表現されますが、本来、衣冠と束帯とはその構造を異にする別の装束です。この講座では、束帯と衣冠の実際の着装を通じて、公家装束の構成、夏冬における生地の区別、伝統的な二重織物などを紹介し、江戸時代における服飾を中心とした有識故実の世界を紹介いたします。

◆講師略歴：たなか・じゅん

昭和53年埼玉県生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程修了。博士(史学)。現在、学習院大学非常勤講師・東京文化財研究所研究補佐員・公益財団法人徳川記念財団特別研究員。公家装束を中心にした日本服飾史のほか、公家文化、有識故実などを中心に研究。

- 開催日時：12月１日(火)　14時～15時30分
- 申込締切：11月23日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

見学会

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(3)
ー岩本町から吉原町の旧地まで

◆前回の終点岩本町から「於玉が池」「藍染川」「弁慶橋」「大門通」「錦絵」と題した挿絵の場所をめぐります。歩行距離は3kmほど、所要時間は2時間半を予定。
なお、解散は東京メトロ日比谷線の人形町駅になります。

- 開催日：12月6日(日)　小雨決行
- 集合時間：13時15分(時間厳守)
  受付は12時45分より開始、集まり次第出発
- 集合場所：東京メトロ日比谷線「秋葉原」駅5番出口、和泉橋北詰の広場
- 申込締切：11月26日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(保険申込の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号を連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

「えど友広小路」原稿募集！

江戸東京に関連することで，普段あなたが思ったり感じたりしていることはありませんか？　日頃からいろいろ関心を持って調べたりしていることはありませんか？

それを1000字程度の文章にして，えど友広小路の「会員投稿欄」にぜひご応募下さい。広報部会ではみなさんの投稿をお待ちしています。順次掲載させていただきます。

原稿は江戸博「友の会事務局」宛にお送り下さい。

送付先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館「友の会事務局」

また，原稿を電子メールでも受け付けできるようにしました。下記**専用アドレス**にお送り下さい。ご意見，ご要望をメールでいただくこともできますので，ご活用下さい。

広報部会メールアドレス：
edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展　「浮世絵から写真へ ―視覚の文明開化―」

会　期：10月10日(土)～12月6日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし11月23日は開館、11月24日(火)は休館)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●特別展　「レオナルド・ダ・ヴィンチ ―天才の挑戦」

会　期：1月16日(土)～4月10日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし1月18日、3月21日・28日は開館、3月22日(火)は休館)
会　員：一般730円、65歳以上370円、大・専門生580円
同伴者：一般1,160円、65歳以上580円、大・専門生930円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

好評開催中!

●市民からのおくりもの2015

会　期：10月20日(火)～12月6日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし11月23日は開館、11月24日(火)は休館)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

次回予告

●天璋院の用箪笥(仮称)

会　期：1月2日(土)～2月21日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし1月4日・11日・18日開館、1月5日(火)は休館)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

催事のお申込方法

◆**普通はがき**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館**「友の会事務局」**
＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第88号
平成27年11月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、大橋弘依
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話03-3626-9910